

リベラルアーツ教育環境におけるコロナ禍での情報教育の一実践

未代 誠仁¹

概要: 本報告では、オンラインクラスとして実施した科目「コンピュータリテラシー I」における取り組みを紹介する。リベラルアーツ教育を提供する桜美林大学の基礎教育プログラムを構成している同科目は、コロナ禍においてオンラインで開講されることになった。オンライン授業には対面授業とは異なる点が多く存在するため、同科目では教員及びスタッフの Faculty Development を実施し、授業品質の維持を目指している。本報告が、人文科学とコンピュータ研究会第 127 回研究発表会 (CH127) における企画セッションでの議論に貢献することができれば幸いである。

キーワード: オンライン授業, 情報教育, Faculty Development

A trial for information study classes as a part of liberal arts education under the COVID-19 pandemic

KITADAI, Akihito¹

Abstract: This report presents an educational trial in online classes of the “Computer literacy I”. The Computer literacy I, belonging to a fundamental education program of J. F. Oberlin University with liberal arts education, has been provided as online classes under the COVID-19 pandemic. Since online classes have many different points from face-to-face classes, faculty development for teachers and staffs of the online Computer literacy I have important roles to keep the educational quality. The report is to provide some topics for the discussions in the CH127 of IPSJ SIG Computers and the Humanities.

Keywords: online classes, information study, faculty development

1. はじめに

桜美林大学 (以下, 本学) では, 学群制の採用/リベラルアーツ学群の設置, 学群間での科目の共通化/相互提供などを通して, 学生にリベラルアーツ教育環境での学びを提供している。

新型コロナウイルス感染症の流行によるコロナ禍について, 本学では「対面授業を主軸」としつつ, 学生/教職員が持つ不安や置かれた状況に寄り添う教育活動の実現を目指してきた。本学の町田キャンパスを拠点とする健康福祉学群およびリベラルアーツ学群 (以下, 在町田 2 学群) では, 入学生が入学学期に受講しなければならない必修の基礎科目 (以下, コア科目) を複数指定している。この中に, 両学群が情報リテラシーとして学生に求める知識・スキルの修得を目的とした情報教育科目「コンピュータリテラシー I」を提供している。また, 過去に町田キャンパスを拠点としており, 現在は新キャンパスに移動した健康福祉学群およびビジネスマネジメント学群にも, コンピュータリテラシー I を源流とするコア科目が存在している。

コンピュータリテラシー I は, PC 教室を用いた対面授業として設計・実装された科目である。授業時間中の PC 教室には教員の他に, 本学の情報システム部に所属する Teaching Supporter と呼ばれる職員 (以下, TS) が待機・巡

回しており, 学生の質問への回答, 手が止まっている学生への手解きなどの学修支援を提供している。TS は, 授業に参加しない時間帯を用いて, 別の PC 教室 (以下, 演習室) において学生への授業時間外学修支援も提供している。独習, 課題答案作成などを行う学生は, 教員とのコンタクトが取れない時間帯であっても, 演習室において質問への回答あるいは手解きを受けることができる。

このように, コンピュータリテラシー I では教室リソースおよび対面でのコミュニケーションを土台とした学びを実践してきた。しかし, コロナ禍においては PC 教室への学生の集約, および対面でのコミュニケーションに制限が加わることになった。そのため, PC 教室/演習室をオンラインに移行することになり, オンライン授業を前提とした教職員の Faculty Development (以下, FD) が必要になった。

本報告では, リベラルアーツ学群に所属し, 在町田 2 学群のコンピュータリテラシー I の授業運用を管理する科目担当コーディネーターを務める著者の視点で, 本学において実施された教職員に対する FD, および今後の課題について述べる。なお, 企画セッションへの話題提供を目的とした簡易な報告であることを予めご理解いただきたい。

2. コンピュータリテラシー I の役割

リベラルアーツ教育環境における基礎科目の役割とし

¹ 桜美林大学
J. F. Oberlin University

て、様々な学問領域の学びにつながる基礎力の構築があげられる。コンピュータリテラシー I では、演習科目としてカバーできる範囲において、情報モラル／情報セキュリティに関する知識、およびコンピュータの使い方を可能な限り一般化した形で教示している。また、カリキュラムには実技を伴う複数回の小テスト、および2単位科目に相応の授業時間外学修課題を組み込み、学生の成績は可／不可の2段階ではなく4段階＋落第の5段階で評価している。成績を多段階で示すことは、学生が学修単元と自身の相性を客観的に認識することにつながる。リベラルアーツ教育環境が提供する多様な学びの中で、学生がコンピュータと真剣に向き合う機会を設け、一人ひとりの個性に合った学びのパスを見つける支援をすることも、コンピュータリテラシー I が担う役割の一つになっている。

3. オンライン授業における課題と対応

コロナ禍における感染拡大防止のため、本学では対面授業をオンラインで同時配信するハイブリッド授業、あるいは科目自体のオンライン化を柔軟に導入することになった。前節で述べたコンピュータリテラシー I の役割はオンライン授業においても変化しない。一方で、オンライン授業環境では教職員と学生の間でのコミュニケーション／大学が学生に提供する機器サービスなどに制限が生じる[1]。

例えば、「教員が授業中に手の止まっている学生を見つけて支援し、すぐにクラス全体への講義に戻る」という動作を、対面授業と同様にオンライン授業で実施することは難しい。また、プライベート環境で授業を受けている学生への配慮として、学生側カメラ／マイクの使用、あるいは学生画面の共有については必要性を踏まえた慎重な判断が求められる。効果的かつ円滑に授業を実施するためには、教職員が「授業時間内に実施できること／できないこと」を理解・区別し、学生が追従しやすい授業時間内の進行、および熱意のある学生を置き去りにしない授業時間外学修支援を実現することも大きな課題となる。

4. 教職員向け FD の実施

多数のクラスが開講される科目では、科目内での協議・合意形成を通して、すべてのクラスで同じ学びを提供することが大切である。在町田2学群ではコア科目にコーディネーターと呼ばれる専任教員を配置し、科目内での学びを管理している。筆者がコーディネーターを務めるコンピュータリテラシー I では、各学期の開始前に FD を実施し、クラス担当教員による協議・合意形成を図っている。オンライン授業の実施に当たっては、「学生側カメラ／マイクの利用が可／不可となる場面」、「ネットワーク／機器のトラブルが発生した学生への対応」、「学群の指示とは異なるコンピュータで授業参加している学生への支援」、「授業時間外学修／配布資料に移動する学修単元」などについて協議

し、基本方針を決定した。ただし、FD はコーディネーターのコピー教員を作るためのものではない。特に、オンライン授業のように未知／未経験の部分が多い課題に対しては、FD を通してコーディネーターを中心とした教員間のコミュニケーション基盤を確立し、教員／教員グループの水準向上につなげていくことが最重要と考えている。

職員である TS、および TS 所属部署である本学情報システム部の関係者には、教員向けの FD にも参加してもらい、協議および合意形成の過程に参加してもらっている。また、コーディネーターと同部署担当者との協議も随時実施している。オンライン授業では教員と学生とのコミュニケーションが希薄になるため、授業時間内外を通して学生への支援を提供する TS の役割が重要性を増す。

例えば、TS は演習室として設置したオンラインアカウント上で学生への個別の学修支援を提供している。個別支援では画面共有／マイクなどの利用も比較的容易になり、熱意はあるがスキルが追い付いていない学生への支援に適している。演習室を担当する TS が教員との間で問題意識や目標を共有し、また、TS の業務を通して得た知見を教員にフィードバックすることで、オンライン授業の制限に起因する課題の緩和につながると考えられる。

5. 今後の課題

以上のような取り組みを通して、関係教職員を含めたオンライン授業の水準向上を図っているところではあるが、対面授業に比べると課題は多い。例えば、前章でオンライン環境における学生への個別支援を取り上げたが、オンラインでの支援は学生の意思表示を起点にすることがほとんどであり、学生自身が支援の必要性を感じていない／支援を受けることに消極的である、といった場面において現状の支援体制は十分な効果を発揮できない。手の止まった学生を教職員が積極的にサポートできる対面授業に比べて、オンライン授業は学生の熱意に対する依存度が高い授業形態といえるが、学生に意識改革を求める課題だけに解決は容易ではないと考えられる。その他、学修単元の移動により授業時間外学修への依存度が大きくなるという課題もある。コロナ禍においては、それ以前と比べて「何がどこまでできるのか」という問いを教職員が持ち続け、挑戦し続ける意識が大切になる。

謝辞 本報告は、桜美林大学学術研究振興費 21_28 の支援、および桜美林大学コンピュータリテラシー I 関係者の協力の下に作成された。ここに感謝の意を表す。

参考文献

- [1] 末代誠仁, オンライン形式でのコンピュータリテラシー教育における教育支援職員の役割についての一考察, 情報教育シンポジウム (SSS2020) 論文集, 2020, Vol. 2020, pp. 225-231.